

市場から世界をみれば

IS6 情報システム株式会社 大谷淳一



ない。

ところが、今回のマグロ問題は日本人が知らないうちで起きていた。舞台は地中海である。

地中海におけるマグロ漁獲の方法は、日本人の想像を絶するものだ。まず航空基地からマグロ探知をする航空機やヘリコプターが飛ぶ。マグロの群れを見つけると、さらに宇宙からの衛星情報を駆使して、群れを追い詰める。そして、巻き網漁船団が「根こそぎ」マグロを捕獲するのである。捕獲されたマグロは、すくには市場に持ち込まれない。「蓄養」と呼ばれる方法で、生簀で一定期間育てられ、その後出荷されている。

この蓄養がマグロ激減の原因なのだ。空から宇宙から海から、立体的にマグロの群れを見つけて、すべてを獲りつくす。幼魚も捕獲してしまう。通常は育っていないマグロは漁の対象外になるはずであるが、蓄養という考え方は、育っていないマグロでも一定期間を育てれば出荷に耐える。世界中でマグロを生簀で育てれば出荷に耐える。世界中でマグロを食ははじめたので、マグロが売れだしたのである。世界でマグロを蓄養すればある。そして現在第三の疑問がわいてきた。現在の日本は、マグロが極端に入荷してこない。

近年、日本文化を象徴する「SUSHI」は世界中でブームを巻き起こし、その結果、今まで食べることがなかった人々も魚を食べるようになった。このことがマグロ資源の枯渇へつながったのも事実である。その意味では、日本もまったく無関係ではないのかもしれない。

この蓄養がマグロ激減の原因なのだ。空から宇宙から海から、立体的にマグロの群れを見つけて、すべてを獲りつくす。幼魚も捕獲してしまう。通常は育っていないマグロは漁の対象外になるはずであるが、蓄養という考え方は、育っていないマグロでも一定期間を育てれば出荷に耐える。世界中でマグロを生簀で育てれば出荷に耐える。世界中でマグロを食ははじめたので、マグロが売れだしたのである。世界でマグロを蓄養すればある。そして現在第三の疑問がわいてきた。現在の日本は、マグロが極端に入荷してこない。

第5回 「生鮮の世界」 ～マグロはどこへ行くか～ 後編

地中海におけるマグロ問題は、環境問題としての資源確保の他にも、経済問題としての資源確保なさそうである。将来くるであろう食糧危機を見据えた「たくわえ」を地中海で何者が操作しているように見える。もしかしたら地中海やマグロの生簀には豊富にマグロが泳いでおり、それが隠すためにマグロ問題を通して日本を標的にしているのかもしれない。

【略歴】 1957年北海道美唄市生まれ。85年、食品管理、生鮮管理のシステムを開発する情報システムを創業。荷受卸売業者や食品製造会社、仲卸業者向けのコンサル